

## II. U.A.E 地元アラブ人の日常生活にみる文化変化

——ドバイでの文化人類学的調査から——

鷹 木 恵 子

## 1. はじめに

アラブ首長国連邦 (The United Arab Emirates、以下U. A. E. と略す。) では、1962年よりアブダビで、1969年からドバイで石油生産が開始されているが、それ以降巨額の石油収入によって急激な社会・経済的变化が進行している。石油収入は、単に経済的变化をもたらしたばかりでなく、石油生産・経済開発過程ではマンパワーの需要に応じるかたちで諸外国から大量の出稼ぎ労働者が流入し、社会構造的にも著しい変化をもたらした。1980年の統計では、U. A. E. の総人口104万人のうち、その85%を外国人が占めており<sup>1)</sup>、さらに労働市場における出稼ぎ外国人労働者への依存率にいたっては、1985年の統計では90.3%という異常に高い数値にまで達している。<sup>2)</sup>

本稿は、昭和62年度文部省科学研究補助金海外学術調査「湾岸地域における文化融合と文化摩擦に関する総合的研究」(研究代表者：片倉もとこ国立民族学博物館教授)の一環として行なったU. A. E. での第1回調査に基づく予備的報告である。<sup>3)</sup> U. A. E. は、このように石油生産開始以降の劇的な変化の過程にあること、またさまざまな民族が混在しているという点では、文化融合や文化摩擦の問題を考える対象としては極めて興味深いものがあると言える。

U. A. E. は、1971年に1882年以来の英国保護領下から独立した新しい国家であり、現在7つの首長国、アブダビ、ドバイ、シャルジャ、アジュマン、ウム・ル・カイワイン、ラース・ル・ハイマ、フジャイラから成る連邦国である。歴史・地理的には、古くから交易を通じてインドや中国、ビルマ、シヤム、マレーシアなどの東南アジア、さらに西はザンジバルをはじめとするアフリカ大陸の東岸とも結ばれてきた地域でもある。<sup>4)</sup> 現地での調査は、昭和62年7月下旬から8月下旬までの約1ヶ月間、U. A. E. の特にドバイ市を中心として行なった。ドバイは、中世時代から真珠産業の中心としてまた海港として知られてきた町であり、今日でもU. A. E. を代表する商業都市、

貿易港として重要な役割を果たしている。1985年の首長国別の統計ではドバイの人口は約31万人。<sup>5)</sup> 地元のアラブ人、近隣のアラブ諸国の人々に加え、ペルシャ人、インド人、パキスタン人、フィリピン人やタイ人などの東南アジア系の人々、ソマリア人などのアフリカ人、欧米人など多種多様な人種や民族が、それぞれの民族衣装などをまとって道を行き交う活気にあふれた都市でもある。

さて、ここで文化の融合や摩擦の問題を具体的にU.A.E.を対象として考察していくにあたっては、先ずその分析視点として大きく分けて次のような視点が考えられると思われる。その第一としてはU.A.E.へ職を求めて流入してきた外国人出稼ぎ労働者側の視点からのものである。すなわち各外国人の自国の文化伝統と、出稼ぎ先U.A.E.でのアラブ・ムスリム文化および諸民族の文化との間における問題として文化融合、文化摩擦を捉えるというものである。第二としては、地元のアラブ人側の視点からのものである。これにはさらに次のような二つのレベルが考えられると思われる。ひとつは地元のアラブ・ムスリム文化とこのような外国人労働者とともにもたらされた諸民族の文化との間の問題であり、もう一方は近年の急激な変化のなかで彼らが否応なく感じているアラブ・ムスリムの伝統文化と近代的西欧文化との関わりの問題である。U.A.E.の出稼ぎ外国人労働者を対象とした文化融合・文化摩擦の問題については、すでにドバイでのケーススタディに基づき、別の小稿において報告をしたため<sup>6)</sup>、ここでは残された後者のすなわち地元のアラブ人の視点から、この問題を考察し報告することにしたい。

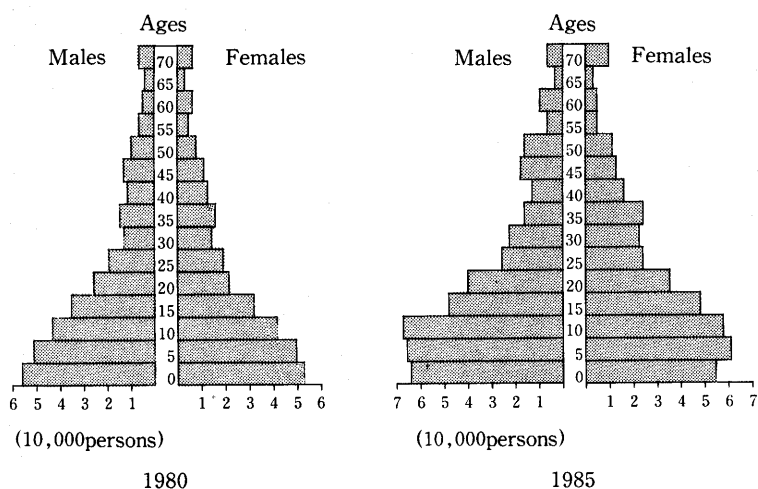
U.A.E.の地元アラブ人の視点から文化融合・文化摩擦の問題を論じる場合の上述した二つのレベル、アラブ・ムスリム文化V.S. 諸民族文化と、アラブムスリム文化V.S. 近代西欧物質文化という視角のうち、前者の地元アラブ人と諸民族との接触から生じる文化融合や摩擦の問題については、すでにいくつか関連する研究報告がみられる。例えば、日本においても中東調査会出版の『中東産油国における外国人労働者に関する調査研究』に収録された「外

国人労働者が受入れ国において惹起する問題」(武藤幸治)、「受け入れ国の外国人労働力に対する政策」(富岡倍雄)、「アラブ首長国連邦労働法」(資料編)などは、日本でほとんど初めてなされた中東出稼ぎ外国人労働者に関する研究であり、具体的事例、資料としても意義深いものがある。<sup>7)</sup> また、ロンドンの少数民族保護団体 (Minority Right Group) から出版された *Migrant Workers in the Gulf* も労働者と経営者間の問題なども取り上げており興味深い内容となっている。<sup>8)</sup> さらに U.A.E. の地元研究者 Khalid Bin Muhammad al-Qasimi による『外国人労働力とその GCC 諸国への悪影響 (Al-'amālat al-ajunabiyat wa āthārḥā as-salbiyat 'alā duwāl majlisi at-taauni al-khaliji)』と題された著書などは、題名からも察し得るとおり、地元のアラブ人たちの出稼ぎ外国人労働者に対する論理を、よく表わしているものとして参考になる。<sup>9)</sup> すなわち、地元アラブ人の立場から石油収入の多くが外国人を通して国外に流出していることへの不満、社会福祉施設などの多くが自国民ではない外国人に利用されていること、外国人労働者の技術習得は長期的には U.A.E. の産業にとっては脅威となること、諸外国からの労働者の流入が社会の風紀を悪化させたり、彼らの貧しい住宅環境が町の景観を損なうなど、さまざまな指摘がなされている。また、実際地元のアラブ人と外国人労働者の接触、およびそれによる文化融合や文化摩擦の現状を具体的に捉えるためには、彼らが直接に関わり合う、例えば労使関係あるいは産業関係の現場すなわち会社や工場など、ある企業を対象に調査を進めることなどもひとつの有効な方法として考えられよう。今回の調査では、ただしこうした具体的現場は、調査期間が一月ほどであったこと、筆者にとっては初めての調査地であったことなどから、残念ながら調査する機会をもてなかった。したがってそれらは今後の調査における課題とし、ここでは地元アラブ人の視点の后者のレベル、すなわち伝統的アラブ・ムスリム文化と近代的西欧物質文化の間における文化融合や摩擦の問題に焦点をあて、考察することにしたい。

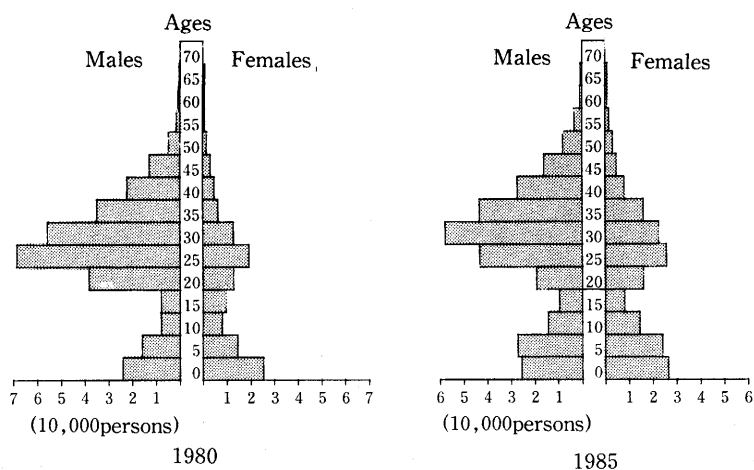
具体的には、地元のアラブ人と接し短絡間ではあるがともに生活したなか

# FIG 1. NATIONAL AND NON-NATIONAL POPULATION PYRAMIDS OF DUBAI EMIRATE

## NATIONAL POPULATION



## NON-NATIONAL POPULATION



Sources :

- Central Statistical Department, Census 1980.
- Socioeconomic and Origin-Destination Sample Survey 1985.

での会話や観察から得られた資料を基に、日常生活での変化のあり方すなわち、衣・食・住、家族・親族の問題、宗教観や倫理観・作法などに実際に観察される変化の例を挙げ、それらの変化のなかから文化融合や摩擦の問題を考察する。日常生活における文化変化に注目し、受け入れられているものと受け入れられず拒否されるものことから、ある程度、文化融合や文化摩擦の問題をも把握し得るのではないかと考えるからである。またここで特に日常生活に注目することについては、文化融合や摩擦とは、抽象的概念的「文化」が一人歩きするようなかたちで起こるようなものではなく、必ず人々を媒介して起こってゆくものであるという認識に基づいており、そうした文化を営んでいる人々が日々経験を重ねている場、すなわち日常の生活に焦点をあててみることもひとつの有効な方法ではないかと考えたことによる。ここでは、以上のような方法論的関心からひとつの試みとして、地元のアラブ人の日常生活における変化に注目し、そこから文化融合や摩擦の問題を考えてみたいと思う。では、以下具体的なインフォーマントの紹介や調査事例の提示を行なっていくが、その前に、先ずその背景にある U.A.E. の社会・経済的变化について極く簡単にみておくことにしたい。

## 2. U.A.E. の石油生産以降の社会・経済的变化について

U.A.E. の石油生産開始以降の社会・経済的变化の概要をつかむために、ここでいくつかの統計数字を挙げてみることにする。

既述のように石油の発見は、60年にアブダビで、65年にドバイで、さらに72年にはシャルジャでも発見されているが、生産量ではアブダビが圧倒的に高い比率を占めている。74年の時点ではアブダビが U.A.E. の総生産量 6 億 1,172 万バレルの 84.5% を、ドバイとシャルジャがそれぞれ 14.5% と 1% を占めている。<sup>10)</sup> 連邦形成後も連邦後も連邦全体の収入として全首長国に平均化されるようには制度的に必ずしもなっておらず、石油開発過程では各首

長国間の貧富の差がひろがる傾向があると指摘されている。<sup>11)</sup> こうした点を一応踏まえた上で、アブダビの石油収入について試みるならば、63年に600万ドルだったものが、70年には2億3100万ドルに増え、すなわち7年間で40倍という伸び率を示している。連邦誕生後の数値では71年の4億8100万ドルから81年には135億ドルに、すなわち10年間でやはり28倍という伸びを記録している。連邦全体の国内総生産についても、72年に56億6500万ディルハムだったのが、82年には1167億9300万ディルハムに、すなわち約20倍の増加となっている。そのうち、アブダビが63%を、ドバイが26%を占めている。<sup>12)</sup> この急な経済成長は先に述べたとおり、必ずしも全首長国に平均化された成長増加率ではない不均衡を伴ったものではあるが、調査地のドバイもアブダビほどではないにしろ、かなりの高度成長を遂げた地域であることは充分みてとることができよう。

次に人口統計について試みるその増加には著しいものがある。1960年にはU.A.E.全体で約11万人ほどであった人口が、1968年には18万人、1973年には36万人と激増し、かつ石油価値の急騰とともに特に1973から74年を境に人口増加がさらに急速になっている。1975年には73年の倍近い66万人に、80年には104万人、83年には134万人という大幅な増加を記録している。<sup>13)</sup>

ドバイについても、1962年には約6万2000人だった人口が、75年には18万3200人、80年には27万6300人という増加を示し、86年には31万人に達している。<sup>14)</sup> このような人口増加は、主に大量の外国人労働者の流入によるものであり、それが人口構成上、国民と外国人の比率や性別・年齢別での構成に歪みをもたらしていることは言うまでもない。図1は、1980年と1985年のドバイの性別・年齢別の人口構成グラフであるが、これをみても、労働人口に相当する20代から40代の男性部分が著しく突出しており、その歪みをよく表わしている。<sup>15)</sup> また、既に指摘したとおり1980年の統計では総人口104万人のうち、外国人が85%を占めており、さらに労働人口において外国人が占める割合はさらに高く1985年には90.3%となっている。

さて、以上のような統計数字による社会・経済の変化の大まかな様相を踏まえた上で、次にこのような劇的な変化をそこに住んでいる地元の人々は実際どのように受けとめているのか、日常生活においてはどのような具体的変化がみられるのかを、彼らとのインタビューや彼らの生活の観察記録などを基に、以下みてゆくことにしたい。3では調査中に知り合ったドバイの地元アラブ人やその人々を取りまく家族・親戚などを紹介し、また彼らのライフヒストリーの一端、調査中に観察し得た巡礼祭の一日の過ごし方などを紹介する。但しインフォーマントの氏名は匿名とし、仮名で紹介することにした。4ではそれらのインフォーマントの日常生活にみられた文化的変化を、一応わかりやすく提示するために、項目別に衣・食・住、家族・親族、宗教、作法の別に取り上げて考察し、また物質的な文化と精神的価値観的な文化とは必ずしも同様に変化しているのではない点などを明らかにする。なおこれらの資料は充分とはいえない、片寄りもあるものであるが、一応ここでは中間段階のまとめとして紹介するということをお断りしておく。また調査は人類学的参与観察と聞き取り調査を中心とし、調査にあたっては助手や通訳は介さず、アラビア語と英語で行った。聞き取りに関しては、許可が得られた場合には、カセットに録音するというかたちをとった。

### 3. ドバイの地元アラブ人

#### <ケース1> ファウジーヤの一家

ファウジーヤは、36才になる女性。外出する時には必ずボルガ(borga)を着用しているという外見からは伝統的な女性である。21才になる軍に勤務する長男と17才で警察官をしている次男の二人の息子をもつ母親である。夫を下の子がまだ幼かった頃に交通事故で亡くし、現在自分の母親のファータマと息子二人と、さらに同居人として子供の頃からの幼なじみの3才年上の



ラウダと暮らしている。常時この家にいるのはこのメンバーであるが、ラウダの息子で最近結婚したばかりのゾハイイルとその妻オルファが頻繁に出入りしている。ファウジーヤの親戚については、特に彼女の母方の叔父アブデルハミードとその息子の家族、すなわち彼女の従兄弟の家族はこの家によく出入りしている。このファウジーヤの従兄弟は、父親のいないファウジーヤの息子たちにとっては、それにかわる存在ともなっている。この家に住む人人の親族関係は、図2のように示される。

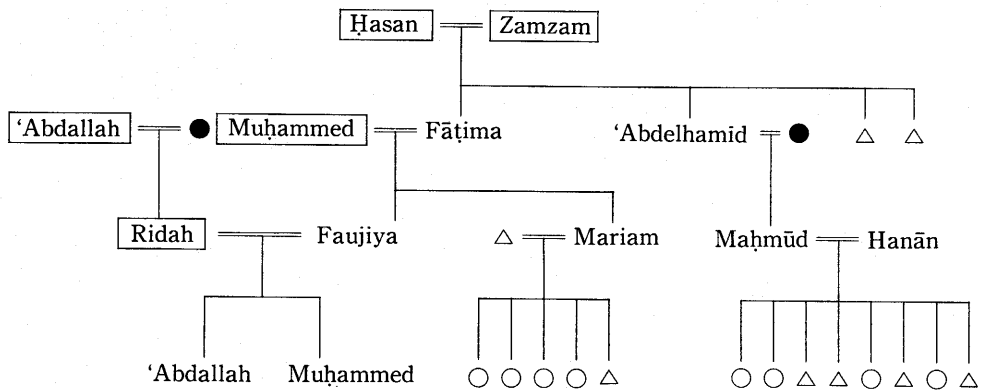
ファウジーヤとラウダは、私が彼女たちを何度か訪問しているうちに生い立ちや家族や昔のことについて語ってくれるようになったため、ここではそれらを内容に差し支えない程度に要約し以下に紹介してみよう。

#### ●ファウジーヤの話

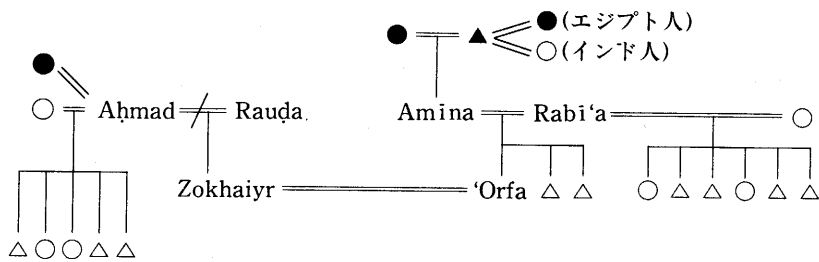
私はドバイのスーク・ル・ザハブで生まれた。昔のスーク・ル・ザハブは、今のような賑わいのある所ではなく、店が5・6軒あるだけで、カンドーラ（kandōra, U.A.E.の女性の伝統的着物）などをぶら下げたり、金の装飾品を少し並べて売ったりしていた。子どもの頃は、冬はテントで夏はアリーシュ（‘arish, 風を通すための大きな煙突状のものがついた家、英語では wind tower と呼ばれている。）で暮らしていた。6才の時から小学校（maktab）へ通うようになった。5年間通ったが、親が私が学校へ行くことをあまり喜んでいなかったのをやめてしまった。だから卒業証書は持っていない。しかし、読み書きは多少できる。そして14才ぐらいの時だったと思う、結婚してムラール（Murrār）に住むようになった。相手は親が決めた人だった。結婚1年後、長男のアブダッラーが生まれた。その名は、夫の父親すなわち父方の祖父の名前をもらったもの。その後また男の子が生まれたが、11カ月で死んでしまった。それから少しして私が19才の頃、ムハンマドが生まれた。ムハンマドの名は私の父の名前をとったもの。

図2

ファウジヤーの家族



Rauḍa の家族



△ = 男性  
○ = 女性

□ = 故人  
▲ ● = 故人

リダー（彼女の夫）は、ムハンマドがまだ幼かった頃に死んだ。（交通事故による即死。しかし彼女はこのことについてあまり話したがらず、死因についてもほかの人からの情報）そして、今から15年前、私が21才の時、このマナーマに移ってきた。その頃もテントとアリーシュとで暮らしていた。その頃は今のようには水道もなく、井戸の水を使っていた。電気もなく、ランプ生活をしていた。現在住んでいるところに木造の家を建てて移り住むようになったのは、今から7年前のこと。このコンクリート造りの家に改築されたのは3年前のこと。我々の家には、今冷蔵庫が3台とテレビが4台、ビデオが1台、電話1台、車が2台（ランドローバーとニッサンのTurbo 300ZX）がある。冷蔵庫は最初の物は6年前から、冷房は家を建てたと同時に2台取り付け、その後2台を購入した。テレビと電話は5年前から、自動車とビデオは買って2年になる。

2・3年前から、近所の婦人協会（Jam'iya an-nahda an-nisāiyya）で、国語の読み書きのクラス（無料）に通い始めた。英語も出来るようになりたいと思っているが、私には難し過ぎる。このクラスにも、しかし母が怪我をして入院し、2回の手術を受けたりしたので、今は中断してしまっている。そのかわり今はときどきレース編み（kajūja）のクラスに出たりしている。家にいても退屈だから、あそこへ行っているいろいろなことを習ったり、またいろいろな人と話をするのは楽しい。

昔はとてもいい時代だったよ。昔は砂の少し小高くなった丘の上にテントを張って暮らしたりしていた。まわりは全部を見渡せた。とても広くて気持ち良かった。今は建物がたくさん建ってしまったから、何にも見えなくなってしまった。昔はなつめやしの木の枝で作ったベッドで寝たり、砂で固めたベッドの上で寝たりしていた。自然の空気は体にいいから、そうして寝ると朝はいつも元気で目覚めていた。今のようには朝から体がだるくなったり怠け者になったりすることはなかった。昔は暑さなんかもなかった。暑いとは思わなかった。冷房付きの家に住むようになってからみんな暑いと思うよう

になってしまった。

### ●ラウダの話

私は自分の年を正確には知らないが、ファウジーヤより2・3才上だからもう40才くらいだろう。ドバイのハーラ・アル・アンスというところで生まれた。小さい頃にコーラン学校（kuttāb）に行ったことはあるが、学校へは行かなかった。ファウジーヤとは幼なじみ。13才の時、同族の者ではないが、良く知っている家族のひとり、アハマドと結婚した。そして16才の時、ゾハイイルが生まれた。しかしゾハイイルがまだ4ヵ月ほどの乳飲み子だという時に離婚したのだ。夫は本当にひどい男でシャイターンだったよ。子どもがまだ目もよく見開くこともできないよううちに母親と赤ん坊を置き去りにして他の女の人のところなんかへ行ってしまったのだから。彼は今は他の女性と結婚してシャルジャに住んでいるけど、私はそれ以来彼に会ったことはない。息子のゾハイイルはときどき会いに行っているようだけど。15年前、このマナーマに移ってきて、ファウジーヤの一家と一緒に暮らすようになった。この家に住まえるようになったのは、シャイフ・ラーシドのお陰だ。彼は寛大でこうしてみんなに家を与えてくれる。

昔は電気がなかったから、夜はランプをもって訪問し合ったりしていた。冬はテントに夏はアリーシュに住んでいた。私の息子のゾハイイルはランプ生活もアリーシュの生活も知らない。昔は車がなかったからみんなよく歩いた。それに冷蔵庫もなかったから、毎日買物に行った。今はその必要がなくなった。昔はなつめやしの実（lotab）とパン（khobz）くらいしか食べずにたくさん歩いた。しかし病気なんかしなかった。薬もアラブの薬しか飲まなかった。しかし健康だった。今は冷房もあるし、車もあるし、とても快適な暮らしだけれどみんな病気だ。外から帰って来ると先ず胸がおかしくなる。そして手とか膝が痛みだす。老いも若きもだ。今は食べ物も昔なかったようなマンゴとかリントとかもあってとても豊かになった。しかしみんな病気だ。

どうしてかわからない。

### ●ゾハイイルの話

現在、アル・アイン大学で経済学を勉強している。年は21才。最近結婚したばかり。学生で仕事はしていないが、結婚しても国が生活を保証してくれているので問題はない。妻のオルファに初めて会ったのは、友達の結婚式で新郎を新婦のところまで送る付き人として女性たちの部屋に入っていったときで、彼女に一目惚れして、自分の家の電話番号をかいた紙切れを彼女に渡したのが始まり。彼女は当時14才だった。彼女からそれから少しして電話があった。そうして時々電話で話すようになった。しかし彼女に二度目に会ったのは結婚式の時。それまで約2年間、会うことは許されなかった。彼女の父親は、生粋のベドウィンで、自分の娘も絶対ベドウィンに嫁がせる積もりでいたから、最初は自分との結婚には大反対だった。しかし始め、母のラクダがオルファの母親のところに話に行き、オルファの母が少しずつ彼女の父親を説得して行ってやっと了承してくれた。彼はもう70才くらいになるが、今もとても元気で町の生活は好まず、ほとんど砂漠で生活している。二人の妻を持ち、ひとりは砂漠で暮らし、もうひとりつまりオルファの母親は町に暮らしているが、時々砂漠へ出かけていく。彼は今もなつめ椰子とラクダのミルクしか口にしない。肉や魚を勧めてもそれしか食べない。しかし、とても元気だ。

自分たちは子供を昔の人のように、たくさん作りたいとは思っていない。二人かせいぜい三人くらい。そのかわり、いい教育をして大切に育てたい。昔の人は自分の部族を守るためにもたくさんの子供が必要だったが、今は治安も良くなり、互いに殺し合ったりすることもなくなったのだから、少ない子供を大切に育てる方がいい。

## ● イードの日

巡礼祭の朝、息子たちは早起きし、日の出とともに行なわれる祭日の特別礼拝に出かけた。ファウジーヤとラウダも5時頃起きて、羊の肉で(家で屠ったものではなかったが) ご馳走を作り始めた。またポットには、カルダモン入りのブラックコーヒー、ミルクコーヒー、お茶の3種類の飲物を用意し、お祭り用の特別な菓子類も用意したあと、またひと眠りし、9時頃起き出す。その頃には通りには晴れ着をきた子供たちがはしゃぐ姿が見え始める。子供たちはお祭りのお小遣い(‘aidiya)をねだりに一軒一軒をまわる。扉を叩かれた家の主婦は小銭を子供ひとりひとりに渡す。そうした子供のグループが朝のうち何回か家の戸を叩く。

昼前にラウダの息子のゾハイイルが妻オルファと彼女の弟などと一緒に祭日の挨拶にやって来た。ゾハイイルらは、母親のラウダやファウジーヤ、彼女の母のファーティマ、息子たちとも互いに抱擁したり握手をしたりして挨拶をかわし、祝いの言葉を述べ合う。その後しばらくして大皿にもられた料理が運び込まれ、それを囲んで食事が始まった。まず、ゾハイイルとファウジーヤの息子二人だけでの食事が始められた。女性たちは同じ家族であっても加わらない。その間女性はまわりに座って話相手となったり、給仕をつとめる。年少の男の子たちも食事に加わるようにとファウジーヤに一応勧められるが、遠慮をして加わらない。男性の食事が済み、彼らが他の部屋へいってしまうと、しばらくして女性たちの食事が始まる。彼女たちは男性が残したものを同じ皿から少し食べ、手早く片付けてしまう。

その日の午後、アブダビからファウジーヤの従兄弟の家族が車でやってきた。この時は子供も加えて女性の数も多かったため、男性と女性の部屋とに分けられ、男性は男性の部屋で昼食をとっていた。朝食に出された料理の他、果物や菓子が添えられて出された。男性の食事が済み、しばらくしてからその残りが女性の部屋の方に運び込まれ、女性たちも昼食をとる。但し、この時も先に食べはじめるのは年輩の女性たちからで、少女たちはやはり遠慮が

ちに角に座り、控えめにしている。お茶の配り方なども同様、年長者から年少者という順に進められることが多い。女性たちの会話もその中心になるのは年輩の女性たちで、話の最中に少女たちが口をはさむことは非常に稀で、部屋で占める位置も年輩の者が中央に年少者は角の方に固まって座ったりする。男性優位、同性間では年長者優位というエチケットが歴然として守られている。

その日の夕刻、ファウジーヤの姉の家を訪ねる。行ったのはファウジーヤと彼女の叔父のアブデルハミードとラウダと私であったため、ファウジーヤの叔父は男性の部屋へ行き、我々は女性たちだけの部屋で接待を受けた。イードの特別な菓子類や果物がふんだんにもられた大皿が出され、勧められた。ファウジーヤの姉の家はかなり裕福なようで家も庭も広々としていた。ファウジーヤの姉は彼女よりかなり年上のようにあったが、外出時でもボルゴは身につけないとのことであった。23才の長女を頭とする4人の娘たちも全員「ボルゴは年をとった女性たちが身につけるもの」と言い、「しかし私たちは年をとっても、もうボルゴは付けない。それは古い習慣で、もうそうしたものは終わりだから」と言っていた。上の娘たちは大学卒や大学生というインテリであったが、しかしアッバーヤ（‘abbāya, 黒い体全体を覆うベール）については、「身につけなくてはならないもの（lāzim）」と答えていた。祭日であることもあって、彼女たちは私たちがそこにいた2時間ほどの間にも衣装のお色直しをして非常におしゃれをしていたが、しかしさまざまな色や柄、デザインの服を着ながらも、長袖、ロングスカートという原則は厳守されており、その範囲内でのおしゃれと多様性であった。さらにドレスの下にはパンタロン風の伝統的な下着の一種のシロワール（sirwāl）も身につけていた。祭日用のきれいな晴れ着を着ているところを是非写真に撮らせて欲しいという申し出には、未婚の女性はそうしたことは応じられないと言い、受け入れられなかった。

### ＜ケース3＞ マリアム

マリアムはU.A.E.の大手の新聞社Al-Ittiḥād社に勤務する23才の女性記者。勤め始めて2年になる。教育は高校まで受けた。(U.A.E.では、雇用においては国民が圧倒的に優遇されている。したがって若くしてまた学歴があまりなくとも重要ポストに就くことは稀ではない。)彼女はシャルジャの出身で、父親は眼科医をしている。仕事は朝の8時から午後の2時まで。月給は5000D..(例えば外国人労働者のホテルのボーイやウエイトレスなどの場合は月給がほぼ十分の一の約500D.但し住居と食事付き。)夫のアリーは25才。ドバイ出身、アル・アイン大学卒で、大学では商学を専攻した。現在は建設省に勤務している。勤務時間は、午前7時半から午後1時半までと午後5時から7時までだが、午後はほとんど戻らなくても良いとのことであった。月給15000D..。現在5LDKで庭、ガレージ、家畜小屋付きの邸宅に住む。夫とそれぞれ車を所有。1ヵ月前に結婚式を挙げ、トルコとギリシャへハネムーンに行き、帰ってきたばかりとのことであった。

#### ●マリアムの話

夫とは、役所の窓口で知り合った。事務手続きに行ったところ、彼がとても親切にしてくれたので、名前を聞かれて、教えた。それがきっかけで、交際するようになった。しかし正式に婚約するまでは二人で外出することは許されず、婚約してから結婚後の新居の準備などもあり、ふたりで外出することも大目に見られるようになった。ハネムーンで行ったトルコやギリシャでは、二人とも洋服の方が便利なので洋服を着ていたが(彼女は膝までのスカートやスラックスも着用)、帰国したら伝統的な格好をしなくてはならない。それがここでは決まりだから。

子供は仕事があるから焦って作りたいとは思わないし、たくさん欲しいとは思わない。今は女性も働く時代、だから仕事は結婚してからも続ける積もり。そのため近々スリランカからお手伝いさんを雇うことにしている。彼女



には月1200D.支払う予定。

シャルジャの両親のところへはだいたい一日おきには会いに行っている。

#### <ケース4> ザイニブ

ザイニブは弱冠21才ではあるが、婦人活動のある組織の長をしている。ドバイの名望家の出身で、夫も行政組織の重要な職に就いている。夫とは従兄弟関係にあり、同族内で結婚するという習わしにしたがって結婚した。大学に1年半在学し、英語を専攻したが、結婚のため退学、一児をもうけた後、現職について働き始めた。彼女の日常的関心や用事の多くは、大家族や親戚との交際のことにさかれている。実際、何度か訪ねて行った彼女の事務所においても、家族や親戚の者の誕生日とか出産祝いなどのことで連絡をとったり、実際に外出したりもしていた。また、友人や親戚などの者との会話の話題も、そのような折のことや贈ったり贈られたりしたプレゼントのことが中心で、そうしたことへの関心の高さ、費やす時間や労力からも、家族や親戚との関係がいかに濃密で重要な意味を持っているかをよく知ることが出来る。

また、このような婦人活動の組織は、現在ではほぼ各酋長国にみられ、地域の婦女子を対象に、アラビア語の読み書き、英語、宗教、育児・栄養学、裁縫、伝統的手芸、さらにコンピューターなどのクラスが設けられているところもあり、女性の教育や職業訓練に力が注がれている。

#### 4. 日常生活にみる物質文化と精神文化をめぐる変化について

以上、紹介した人たちからの聞き取りや日常生活の観察から、次に衣、食、住、家族・親族、宗教・作法の項目別にそこに見られる変化について、みてゆきたい。その過程では特に物質的な面での変化と精神的な面での変化とが必ずしも一致していない点などに留意しつつ考察する。

## <衣>

U.A.E.には多種多様な民族が混在しているが、それぞれ民族衣装をそのまま着ていることもあり、ある程度どこ国籍や地域からの人かを衣装から判断し得ることも多い。U.A.E.の地元アラブ人男性の場合は、白い裾の長いワイシャツ型のタルブーシュ (tarbūsh) という服と、頭にはグトラ (gutura) という白い布を被り、イカール ('iqāl) と呼ばれる黒い輪をのせてそれを止めるという伝統的衣装の着用を厳守している。そのことによって、一見して地元のアラブ人であること、すなわちこの社会ではいわば特権的階級にある人々という見分けがつく。このように「衣装」によって「人」を弁別・分類し得るということは、記号論的な見方からも興味深いものがある。U.A.E.の男性の服装は様式は一様であるが、ただし生地、材質、細かい模様（刺繍の有無など）さまざまな品質や種類のものがあり、決められた型のなかにも多様性がみられる点には留意しておきたい。

女性の服装に関しては、伝統的なカンドーラ (kandōra) と呼ばれる長袖、長裾のワンピースの上に、外出時にはボルガ (borga) と呼ばれる顔を隠す面状のものと頭から裾までを覆うアッバーヤ ('abbāya) を身につけるのが習慣となっている。但し、このうちボルガについては、着用する人々が徐々に減ってきており、特に若い世代の女性たちは、ファウジーヤの姪たちやマリラムの例にもみられたように着用しない傾向が強くなってきている。ボルガの着用時間についても、例えばファウジーヤの場合は、外出時のみ着用し、他人の視線にさらされないようにするが、同じ外出であっても自家用車内でははずしていたりする。ところがファウジーヤの高齢の母親のファーティマの場合は、ボルガが他の衣類同様、常に身につけておくべきものとして習慣付けられており、家にいる時も食事中もはずすことはなく、はずすのは唯一就寝の時だけであった。ファーティマが病院に入院していた時のベッドの上での写真にもファーティマはボルガをつけたままで写っていた。着用時間からするならば、ファウジーヤの母親の世代などは極めて長く、ファウジーヤ

の場合は外出時のみであり、さらに彼女の姪などその次の世代になるともうボルガを身につける習慣が薄れてきており、ボルガの着用に関しては明らかに変化が見られることを指摘し得る。ボルガも男性の衣装と同じく、これを着用していれば、U.A.E.の女性であるとある程度見分けることの出来る指標となっているものである。

次にアッバーヤについてであるが、これはボルガと異なって、年齢の差にかかわらずほとんどの女性が例外なく着用しているものである。女性の社会進出がめざましいなかでもこの伝統は一向にすたれる傾向はみせていない。

また女性のカンドーラについては、今日では西洋のモードの影響を受けて、衿の形や袖、スカートの部分などが新しいスタイルのものも取り入れられ、また着用され始めている。特に若い女性などはこうしたモードにも大変興味をもっており、さまざまな西欧のファッション雑誌にも目をとおしているが、しかし着用しているのは、さまざまな材質や形を部分的には取入れながらも、長袖であること、ロングスカートである点など基本的な点では伝統的価値基準が厳守されているとおり、その範囲内でのバリエーションであるということが、逆に彼らの価値観がどのようなものであるかを浮き彫りにしている。すなわちムスリムとしてふさわしい服装という基本線は、部分的な修正や変化を受け入れつつもほとんど変化していないと言えるであろう。

これらの伝統的な服装に男女ともかなり執着していることの背景には、自国において現在人口比では少数民族として存在し、多民族と混在するなかで、自国民の誇りを示し、アイデンティティの拠り所とする象徴的な表示としての意味があるように思われる。国外の旅行先では、伝統的な服装ではなく、活動し易い洋服を着ながら、帰国するとまた伝統的な服装を着用するという例などからも、これらの伝統的な服装の着用には、単なる伝統の継承ということ以上の積極的意味合いがあることを認め得るだろう。

## <食>

食に関しても、やはり少なからぬ変化が認められる。かつてはなつめ椰子の実やラクダの乳など限られていた食物を摂取していたのに対し、交通手段の発達や交易の拡大によって、現在では遠方からの多種多様な食物を口にするようになってきている。食事に関しての変化は、このような単に食物の材料の種類が増えたということにとどまらず、さまざまな民族とともにもたらされたそれらの民族料理によつての変化もみられる。現在では方々にエスニック料理のレストランが建ち並んでおり、地元のアラブ人もそれらのレストランをとおして多様な料理を楽しむ機会も増えてきている。しかし、外でのそうした機会の増加の一方で、家庭内での食事のあり方は、調理方法や食事の折の作法などは、未だに伝統的なものが守られているようにみうけられる。アイダの食事の折など何回か招待されて食事をした時の観察からも、男女は普通別々に食事をするのが今も習慣としてあり、男性、年輩者が優先という作法やまた大皿をまるく囲んで床に座って食べるという様式なども日常的に観察される。食文化に関しても、物質的な文化の吸収は(或いは融合は)極めて迅速になされている一方で、その物をどのように受け入れて、生活に生かしているか、すなわちどのように調理し、どんな作法で食べるかという精神的文化に関わる面からみるならば、伝統的なものがかなりそのまま継承されており変化はそれほど大きくは起こっていない。日常生活の食の部分に関しても、したがって変化の二面性、すなわち物質面での変化と精神面(調理法や作法など)での変化のずれを指摘し得るだろう。

## <住>

伝統的な住まいの形態としては、冬はテント、夏はアリーシュであったが、既に2でのインフォマントも述べていたように、現在ではほとんどの人々が一戸建ての家かビルなどに住み始めている。町に家を持ちながら砂漠にテントの住まいも持つという人々もいるが、テントやアリーシュがもはや住まい

形態の主流でなくなっているという点ではやはり大きい変化が認められるといえる。アブダビに関する統計ではあるが、アブダビでは1977年からの10年間にDSSCBOによって建設された建物のが4000軒、すなわち日割り計算では1日1軒以上の速度で建設されていったという、この数字からもいかに変化が急速であったかを知ることができる。<sup>16)</sup> これら新築の建物には地元のアラブ人をはじめ高給取りの外国人が住み、かつての旧市街の古い建物などには、低賃金出稼ぎ労働者などが住まう傾向があり、地元のアラブ人、高給取りの外国人、低賃金の外国人労働者などによって、居住地にも或る程度の住分けが認められるというのが現状といえる。

このような物質的、或いは物理・空間的变化の一方で、住文化においても、食の文化同様、精神的文化面ではかなり伝統的なものを温存させているということを描きし得る。現在では多くの人々が近代的な建物に住んでいるが、その住居空間の様式、すなわち間取りや男女の空間の使い分け、家具の配置、家畜との関わりなどを観察してみるならば、かなり伝統的なものをそのまま継承していることがわかる。例えば、テントのなかに男女各々の空間があったように、コンクリート建ての家のなかにも男女別の空間や時には男女別の入口が設けられていることもある。また、一般的に接客の場となる部屋（majlis）に置かれた家具の配置を見ても、例えばイタリア製のソファなどが、昔から majlis に並べられていたクッションと同じようにただそれに置き換えられたかたちでの配置となっている。人と家畜の関わり方についても一戸建ての家の多くには、家畜小屋かまたは庭などに家畜のための小空間があり、完全に都市的生活へと切り替えているのではない点など、近代的建物に伝統的な居住様式が折衷されていることなどが興味深く観察される。

#### <家族・親族>

家族や親戚の紐帯は現在でも極めて強い。イードなどの祭日には親戚同士が訪問し合うことが習わしであるばかりでなく、日常においても例えば、

結婚して夫婦だけの新居を構え、いわゆる「核家族」となってからも、親や兄弟とはきわめて頻繁な行き来が見られる。マリアムの例にも見られたように、親に会うのは一週間に一度くらいかという質問には、強く否定し「一週間に一度なんてとんでもない、必ず一日おきには会いに行く」と答えていたように行き来の頻度がかかなり高い。ラウダの息子のゾハイイルの場合も、結婚して親元から独立しているが、きわめて頻繁に母親のもとに来ている。また名望家の出身のザイニブなどの場合は、日々かなりの時間と精力が家族や親戚付き合いのために費されている。このような例からも、居住形態的には確かに大家族制から核家族制への移行傾向があるように観察し得るが、家族の実質的なかわり合い方に注目するならば、形態からのみ即断し核家族化の傾向にあるとするには、より慎重でなければならないであろう。

また、配偶者の選択についても、従姉妹婚や同族内での結婚が未だ慣行として多く見られる他、相手を自分で捜して選んだ場合でも婚前の自由な交際には現在でもかなりの制約が伴うようである。ラウダの息子のゾハイイルの場合も、オルファに最初に出会って以来、結婚式当日まで約2年間一度も会うことなく結婚したという例なども、物質的には西欧的影響を多く受けながら、価値観・倫理観の面では同様の影響は必ずしも被ってはいないことをよく物語っている。一方結婚後の家庭観については、特に子供については、かつてのような多産志向から子供の数を2・3人程度に押え、その分より良い教育など養育費に充分お金をかけて育てたいという考え方へと変わってきている。

家族・親族については、以上のようにその紐帯が現在でもかなり強く、また結婚に関してもかなり伝統的な倫理観がみられるが、その一方で子供の数などの点では少数におさえるという新しい考え方までできており、部分的には変化もみられるといえる。

### ＜宗教・作法＞

U.A.E.では、本来モスクは石作りで装飾もなく、ミナレットも低い質素なものであったとされる。しかし石油収入を得てからは人口の増加もあり、81年までの5年間の統計では60%の増加を示している。<sup>17)</sup> 金曜日の礼拝の時間には仕事が一時中断され、商店などもその時間は閉店することが義務づけられている。また、テレビ、ラジオ放送でも毎日何時間かは宗教番組が組まれている。U.A.E.で、ワッハブ派の宗教倫理観が、近代化過程にあっても揺るぎないものとしてあることは、既にみてきた日常生活における衣・食・住とかかわる文化や、結婚観のなかにも充分みてとることができる。また礼儀作法や倫理観のなかでも、目上の者に対し敬意を払う姿勢や客をもてなすホスピタリティーの精神は今なお強く残っており、実際調査に際して厚く歓待されたことから強く印象を受けたところである。

U.A.E.の地元アラブ人のなかには、ムスリムでありながら、飲酒をする者など現実の姿とタテマエとが必ずしも一致していない面もみられる。しかし公的には宗教的理念や伝統的価値観は極めて厳格に遵守られており、それが彼らのアイデンティティの拠り所や彼らを統合させる力となっていることは言うまでもないだろう。

### ＜結びにかえて＞

U.A.E.の第1次経済・社会開発5カ年計画（1981-1985）の(1)計画の目標と規模と題された項目の冒頭にその前提条件として次の4点が挙げられている。

- (1) 経済的、政治的、自立達成による連邦基盤の強化。
- (2) イスラム及びアラブの伝統的価値観の維持。
- (3) 経済社会開発への個々人の参加と能力向上。
- (4) 経済の活性化。<sup>18)</sup>

さて、ここで特に注目されるのは、これら経済社会開発の前提条件の

4項目のなかに、(2)としてイスラム及びアラブの伝統的価値観の維持ということが既にはっきりと唱われているということである。これまで見てきたことからわかるように、U.A.E.の地元のアラブ人の日常生活においては、物質的には、外からの文化を吸収し或いは文化融合をしつつ、大きく変化してきていながら、精神的価値観的な面では、ほとんど目立った変化が起こってきていないということが明らかであった。これらのことは、政府が経済社会開発の前提条件として唱っていることと一致しているのである。このことはあたかも政府の政策が国民の生活の隅々にまで効果的に浸透しているかのような印象を与え得るかもしれないだろう。しかし、ここで若干留意点として示唆しておきたいことは、調査でみられたような現状は政府の政策の結果としてよりも、むしろ政府の政策が、国民ひとりひとりの内的な要望を代表するかたちでその総意を反映しているものではなかったのかという点である。このことはここでは結論としてではなく、ひとつの示唆として述べておくことにしたいと思う。また、物質的变化は歓迎し、精神的伝統文化は保守していくという傾向が見られるなかで、インフォマントの話にもあったように、彼らが、では全面的に現在の生活を評価し物質的に貧しかった過去の時代を見下しているかということと必ずしもそうではない、過去の時代を懐かしみその時代の長所をも充分評価しており、かつ物質的に豊かになった現在を一義的に手放しで喜んでいるのでもない彼らなりの時代を見つめている複雑な心境をも、我々は理解しておく必要があろう。

最後に文化融合と文化摩擦の問題に戻って極く簡単にまとめを付け加えておくならば、以上のことから文化の融合については、物質的技術的には極めてスムーズに進んでおり、それはむしろ積極的に行なわれているが、その一方、精神文化の面では、伝統的体系が厳格に保持されており、ほとんど大きな融合はみられないと言えよう。さらにその伝統的文化の維持にあたっては、政府レベルでの既述のような政策も関わりあっているのである。しかしまた、U.A.E.では法律で信教の自由が認められているなど、政治



的にも伝統の維持にあってはそれにより文化摩擦などが起こらぬようある程度そのための配慮、方針が取られていることも付言しておかねばならぬ。

### 註

- (1) 岩永博、武藤幸治、1985年、190頁。
- (2) 石田進、1985年、63頁。
- (3) 調査班は、片倉もとこ教授を代表者とし、石田進教授(国際大学)、高橋和夫助教授(放送大学)と筆者が加わった。片倉先生には調査計画の段階からまた現地調査でも事細かにご指導頂き、また石田先生、高橋先生にも、研究会などをとおして多くの御教示を頂きました。その他、U.A.E.での調査でお世話になりました現地日本大使館をはじめとする多くの方々に厚く御礼申し上げます。
- (4) 石田進、1985年、7頁。
- (5) Dubai Municipality, 1985、P.2.
- (6) 桜美林大学国際学部紀要『国際学レビュー』創刊号、1989年4月発行予定。
- (7) 中東調査会編、1981年。
- (8) Minority Group Right, 1979。
- (9) Khalid Bin Muhammad al-Qasimi, 1987及び1986。
- (10) 岩永、武藤、1985年、188頁。
- (11) 同掲書、188頁。
- (12) 同掲書、190頁。
- (13) 同掲書、29頁。
- (14) 同掲書、31頁。
- (15) Dubai Municipality, 1985、P.6.
- (16) DSSCBは、The Department of Social Services and Commercial Buildings in Abu Dhabi の略称。Khaleej Times, 6 August 1987, p. 6.
- (17) 岩永、武藤、1985年、357頁。
- (18) 同掲書、48頁。

## 参考文献

- F. Arnord, N. M. Shah (ed.) *Asian Labor Migration : Pipeline to the Middle East*, Westview Press, London, 1986.
- J. S. Birks and C. A. Sinclair *Arab Manpower : The Crisis of Development*, CROOM HELM, London, 1980.
- 中東調査会 編 『中東産油国における外国人労働者に関する調査研究』中東調査会, 1981年。
- A. J. Cottrell *The Persian Gulf States*, John Hopkins University Press, 1980.
- R. Cordes, F. Scholz *Bedouins, Wealth, and Change*, The United Nations University, 1980.
- Dubai Municipality *Comprehensive Development Plan for Dubai Emirate*, 1985.
- G. Gunatilleke (ed.) *Migration of Asian Workers to the Arab World*, The United Nations University, Tokyo, 1986.
- 石田 進 『激動の湾岸世界』 御茶の水書房, 1985年。
- イルヤ F. ハリーク 『アラブ諸国のマンパワー』 アジア経済研究所, 1980年。
- アムル モヘッデーニ
- 岩永 博、武藤 幸治 『アラブ首長国連邦』 科学新聞社, 1985年。
- A. S. Kanafani *Aesthetics and Ritual in The United Arab Emirates*, American University of Beirut, 1983.
- Khalid bin Muhammad *Al-'amālat al-ajunabiyat wa āthārḥā as-salbiyat 'alā duwāl, majlisi at-taauni al-khaliji*, Beirut, 1987.
- 
- Al-qūwa al-'āmilat wa at-tarkib as-sukānī fī dawlat al-imālāt al-arabiyyat al-muttahidat*, Beirut, 1986.
- 松園 万亀雄 『文化の接触と変化、進化』『文化人類学事典』ぎょうせい, 1977年。
- M. G. R. Report, No. 68 *Migrant Workers in the Gulf*, London, 1979.
- 宮治 一雄 『中東のエスニシティ』 アジア経済研究所, 1987年。
- 長場 紘 『湾岸諸国における労働力移動の現状と将来』中東調査会編, 前掲書, 1981年, 3-32頁。
- R. Redfield, R. Linton, “Memorandum for the Study of Acculturation,” in *American Anthropologist*, 38, pp. 149-152, 1935.
- M. Herskovits *Manpower and International Labor Migration in the Middle East and North Africa*, Oxford Univ. Press, 1972.
- I. Serageldin et al.